

『ゼア・ウィル・ビー・ブラッド』

2007年／アメリカ／ポール・トーマス・アンダーソン監督作品

いずれ血に染まる——資本主義と家族と宗教——

会員 鈴木 隆弘 (62期)

タイトルは、旧約聖書出エジプト記の「十の災い」の一文、"There will be blood everywhere in Egypt."に由来する。この災いに満ちたおどろおどろしい作品を紹介したい。

監督のポール・トーマス・アンダーソン（「PTA」）は、弱冠27歳で作り上げた「ブギー・ナイツ」で成功を収め、その後も多くの名作を産んでいる鬼才だ。主演はアカデミー主演賞を3回受賞している唯一の俳優ダニエル・デイ＝ルイス（引退を宣言したので正確には「元」俳優）である。

まず、冒頭のシークエンスからして圧巻である。舞台は19世紀末のアメリカ西部。山師のダニエル・ブレインビューは、ツルハシとダイナマイトで鉱石を掘っている。足場が壊れ、脚を折るが、見つけた金を懐に入れて自力で穴底から這い上がり、そのまま背這いで町まで売却しにゆく。数年後、ブレインビューは工夫たちと原油を試掘している。油脈が見つかる。そして最初の血が流れる…。ここまでの14分30秒間、台詞は全く無く、映像と不協和音から成る交響曲（レディオヘッドのジョニー・グリーンウッドのスコア）だけで成立しているのだ。しかも前半7分は孤高のメソッド・アクター、デイ＝ルイスの比倫を絶する一人芝居である。映像も実に美しいが、それは審美性を探求した結果ではなく、リアルなストーリーテリングのため冷徹に削ぎ落された機能美だ。

更に数年後、ブレインビューは、石油があると思しき牧場を貧しいサンデー家（長男イーライ）と交渉し買い受け、周辺一帯も安価で買い占める。油脈は目論見どおり掘り当てられるが、その際の事故で幼い息子H・Wは聴力を失う。H・Wを寄宿学校に放逐し、孤独を極めるブレインビューの前に腹違いの弟と称する男が現れる。

他方、イーライは福音派の牧師として悪霊祓いのパフォーマンス（ブレインビューはこれを「大したショーだ」と侮蔑する）と巧みな弁舌で信者を増やし、地域社会のカリスマにのしあがり、ブレインビューとの対立を深めてゆく。

本作のテーマは、「資本主義と家族と宗教」であろう。

ブレインビューは資本主義の権化だ。世界は競争するためのフィールドであって、人には敵と味方の二種類しかいない。地主らとの交渉に幼いH・Wを同伴させるのは、コミュニティ全体の発展を願うファミリー・マンであることを偽装するためだ。実子すらも欲望を実現するためのリソース（資源）の一つなのである。彼も心の奥では人との繋がりを求めているが、それには支配的な関係であれば、という留保がつく。

イーライもまた、「我々は家族だ」と叫びながら金、権力、名声を追い求める。この欺瞞と野心に満ちた宗教家をポール・ダノが熱演している。

中盤、ブレインビューは再びツルハシを高く振り上げる。ただし、その目的は採掘ではない……。

油井から吹き上がるどす黒い原油は、血よりも血生臭い。大地を破壊し、その返り血を浴びたブレインビューは、肥大しきって行き場を失った自我のために「家族」を失い、破滅させ、そして自身も破滅へと向かってゆく。

PTAは、カリフォルニアを舞台にした映画を多く撮っているが、本作では、西の最果て、フロンティア終焉の地としてのカリフォルニアの断層が切り取られている。本作は2000年代の映画であるにも拘わらず、時の洗礼を経たクラシックの風格を備えており、往年の西部劇の傑作群がそうであるように、既にアメリカ建国神話の一章を為してさえている、と私は思う。